

## ワケデハナイ

齊藤, 学  
中華大学

<https://doi.org/10.15017/1518730>

---

出版情報：九州大学言語学論集. 35, pp.364-381, 2015. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室  
バージョン：  
権利関係：



# ワケデハナイ

齊藤学  
(中華大学)  
haksa@live.jp

キーワード：推論、推意、現実世界、否定、モダリティ

## 1. はじめに

p ワケデハナイは一般に推論の帰結 p の否定を表すと考えられている<sup>1</sup> (寺村 1984、日本語記述文法研究会 2003 他)。

(1) p ワケデハナイ : q からの帰結 p の否定を表す

このような考え方は次のような例をうまく説明する。

(2) A: スポーツ、ずっとやってないなあ。

B: 嫌いななの？

A: いや、嫌いなわけじゃないけど、ここんとこ忙しいんだ。(日本語記述文法研究会 2003:213)

(2)で B は A の「スポーツ、ずっとやってないなあ」という発話に基づき、次のような推論を行ったと考えることができる。

(3) B の推論

根拠 q : A がスポーツをずっとやっていない

---

<sup>1</sup> 推論の否定を表すと述べられることが多い。ただし、この述べ方は q から p が帰結されるとするものの否定という意味と、q から p が帰結されるが帰結された p は誤りであり、実際は  $\neg p$  であるという解釈が可能な表現である。寺村、記述共に意図されているのは後者であるとの解釈が可能であることから、本論のようにまとめている。

帰結  $p$  : A はスポーツが嫌いである

そして A の「いや、嫌いなわけじゃない」は(3)の帰結が誤っていると説明するわけである。

しかし、(1)ではうまく説明できない例がある。

(4) B: 銅メダルですね。おめでとうございます。すばらしいですね。

A: ありがとうございます。でも、金メダルを取ったワケじゃありませんから。

(4)における B は「金メダルを取った」ことを帰結とする推論を行っているとは考えられない。

(5) B の推論

根拠  $q$  : ???

帰結  $p$  : 金メダルを取った

なぜなら、B は A が取ったメダルは金メダルではなく銅メダルであることを既に知っており、そういった知識を持っている B が同時に「金メダルを取った」と推論するの unnatural だからである。

$p$  ワケデハナイが推論の帰結  $p$  が誤りであることを表さないのだとすると、何を表しているのだろうか。本論文では、 $p$  ワケデハナイは次のような意味を持つと提案する。

(6)  $p$  ワケデハナイの意味 :  $w_R \notin p-W^2$

(ただし、 $w_R$  は現実世界を  $p-W$  は  $p$  が真である世界の集合を表すとする)

日常的な言い方に直せば、 $p$  ワケデハナイは「現実世界は命題  $p$  が真である世界ではない」ことを意味すると考えるのである。

(4)が自然であるのは、(6)の意味を持つ  $p$  (=金メダルを取った) ワケデハナイ文が「もし現実世界が命題  $p$  (=金メダルを取った) が真である世界ならと

---

<sup>2</sup> ただし、後で少しだけ触れるが、 $p$  ワケデハナイの  $p$  が命題ではなく発話を表している場合がある。本論文で扱うのは  $p$  が命題の場合だけであり、(6)は  $p$  が命題の場合の  $p$  ワケデハナイの意味である。 $p$  が発話の場合の  $p$  ワケデハナイの意味は(6)とは別に考えなければならないが本論文では扱わない。

ても凄い」という前提下で使用されているため「現実世界はそれほど凄くない」という推意 (implicature) を導出する発話として解釈できるからなのである。また、(1)が自然であるのは、(6)の意味を持つ  $p$  (=スポーツが嫌いだ) ワケデハナイ文が「もし現実世界が通常の世界であるなら  $p$  が真である世界である」という前提下で使用されているため「現実世界は、通常の世界でなく、 $\neg p$  である」という推意を導出する発話として解釈できるからなのである。つまり、推論の否定というのは、 $p$  ワケデハナイの意味なのではなく、特定の前提下での推意 (の一部) なのである。

以下では、まず第 2、3 節で、上述の例が本論文における提案に従うことで自然な説明が可能であることについて詳述する。第 4 節では、「 $q$ 。しかし、 $p$  ワケデハナイ」という使用の型とは異なる例について観察し、そういった例も本論文の提案に従えば自然に説明できることを見る。続く第 5、6 節では、 $p$  ワケデハナイと似た機能を持つ結果状態の否定を表す  $p$  テイナイとの比較、及び本論文の提案の反例となりそうな例を取り上げることを通して、本論文の提案の妥当性について検証を行う。最後に第 7 節で本論文のまとめ及び今後の課題について述べる。

## 2. 推論の否定用法

本節では、 $p$  ワケデハナイが(6)のような意味を持つことにより、上であげた(2)がどのように説明可能であるかについて詳しく見てみることにする。以下に(2)を(7)として再掲する。

- (7) A: スポーツ、ずっとやってないなあ。  
B: 嫌いななの?  
A: いや、嫌いなわけじゃないけど、ここんとこ忙しいんだ。

(7)の  $p$  ワケデハナイ文は(8)のような前提を持っていると考えることができる。

(8) (7)の前提

- a.  $q$  at  $w_R$
- b.  $\forall w(q \text{ at } w \rightarrow (U \rightarrow (p \text{ at } w)))$
- c.  $\forall w(w \in p\text{-}W \vee w \in \neg p\text{-}W)$

ただし、 $w_R$ 、 $q$ 、 $p$ 、 $U$ 、 $p\text{-}W$  は以下を表すとする

$w_R$ : 現実世界

$q$ : 私はスポーツをずっとやっていない

p : 私はスポーツが嫌いだ  
U : 現実世界は通常である<sup>3</sup>  
p-W : 命題 p が真である世界の集合

(9)を見られたい。

- (9) a. 私はスポーツをずっとやっていない。しかし、スポーツが嫌いなワケデハナイ。  
b. ?スポーツが嫌いなワケデハナイ。  
c. 私はスポーツをずっとやっている。しかし、? (私は) スポーツが嫌いなワケデハナイ。

(9a)が自然であるのに対して談話の冒頭で使用されている(9b)が不自然であることから、p ワケデハナイは何らかの前提を必要とすることがわかる。

- (10) a. スポーツをやっていないなら、その人は通常スポーツが嫌いだ。  
b. ?スポーツをやっているなら、その人は通常スポーツが嫌いだ。

また、我々の通常の常識からは(10a)は自然だが、(10b)は自然ではないと言えるだろう。(9a)が自然であるのは(10a)が自然であることに起因し、(9c)が不自然であるのは(10b)が不自然であることに起因していると言えそうである。従って、(7)は(8a,b)を前提としているものと思われる。

また、一般に(11)は不自然であることから(8c)を前提とすることに問題はないだろう。

- (11) ??私はスポーツが嫌いでもあり、嫌いでなくもある。

以上の議論から、(7)の p ワケデハナイ文は(8)を前提に使用されていると言ってもいいように思われる。

では、このような前提下で(6)の意味を持つ p ワケデハナイが使用されることから、如何にして「推論 (の帰結) の否定」という推意が得られるのだろうか。(12)を見られたい。

---

<sup>3</sup> この U は、坂原(1985)が暗黙の前提という概念として扱っているものと基本的に同種のことを想定している。齊藤(2006)も参照されたい。

(12) 前提及び  $p$  ワケデハナイ文から得られる推意

- |   |               |
|---|---------------|
| a. $q \text{ at } w_R$  | (8a)より        |
| b. $\forall w(q \text{ at } w \rightarrow (U \rightarrow (p \text{ at } w)))$ | (8b)より        |
| c. $\forall w(w \in p\text{-}W \vee w \in \neg p\text{-}W)$                   | (8c)より        |
| d. $w_R \notin p\text{-}W$  | $p$ ワケデハナイ文より |
| e. $w_R \in \neg p\text{-}W$  | c,d より        |
| f. $\neg p \text{ at } w_R$   | e より          |
| g. $U \rightarrow (p \text{ at } w_R)$  | a,b より        |
| h. $\neg U$   | f,g より        |

(12)を見ると、(8a)~(8c)の前提と本論文で提案している  $p$  ワケデハナイの意味(6)から(12f)及び(12h)が導出されることが分かり、現実世界では  $\neg p$  であること、また現実世界は通常の世界ではないことが推意として得られることが分かる。

従来、 $p$  ワケデハナイは推論（の帰結）の否定を表すと言われてきたが、これは(8)のような前提下で(6)の意味を持つ  $p$  ワケデハナイが使用されたことから帰結される推意の一部なのであり、 $p$  ワケデハナイの意味そのものではないのである。

### 3. 非極用法

次に、第1節の(4)のような例の存在が、 $p$  ワケデハナイが(6)のような意味を持つとすることによりどのように説明可能であるかについて詳しく見てみたい。この例は反事実  $p$  が事実であった場合最高（あるいは最低）の評価が得られるが、現実世界ではそれより劣った（あるいは優れた） $q$  が事実であるため、最高（あるいは最低）の評価が得られないという推意を導き出す用法（本論文では、非極用法と呼ぶことにする）の例と言える。

以下では、3.1 で最高でない場合、3.2 で最低でない場合について詳しく見る。

#### 3.1. 謙遜用法（最高の評価ではない）

以下に(4)を(13)として再掲する。

(13) B: 銅メダルですね。おめでとうございます。素晴らしいですね。

A: ありがとうございます。でも、金メダルを取ったワケジャアリマセン<sup>4</sup>から。

本小節では、(6)のような意味を p ワケデハナイが持つところから、(13)のワケデハナイ文が如何にして最高ではないという推意を得て、謙遜用法を持つことができるのかについて述べてみたい。

まず、(13)の p ワケデハナイ文は次のような前提を持っていると考えることができる。

(14) (13)の p ワケデハナイ文の前提

- a.  $q \text{ at } w_R$
- b.  $\forall w (q \vee p \vee \dots \text{ at } w \rightarrow r \text{ at } w)$
- c.  $\forall w (\neg p \text{ at } w \rightarrow \neg s \text{ at } w)$
- d.  $\forall w (w \in p\text{-}W \vee w \in \neg p\text{-}W)$

ただし、p、q、r、s は以下を表すとする

p:A は金メダルを取った

q:A は銅メダルを取った

r:A はすばらしい

s:A は一番すばらしい

以下で、(14)について検証する。まず、(14a)は B の発話から明らかである。また、(13)の文脈から、A が金メダルか銅メダルを取っていればすばらしいと A は認めているものと思われる。これは、そのように認めていない状況では、(13)が不自然になることからわかる。ただし、メダル獲得以上をすばらしいと認めるか、入賞以上をすばらしいと認めるか、準決勝進出以上をすばらしいと認めるか等、どこからすばらしいと認めるかについては(13)の文脈だけからでは特定できない。しかし、何らかの基準点がありそれ以上であればすばらしいと認めており、すくなくとも銅メダルと金メダルはすばらしいと認めているものと思われる。

(14c)についてだが、金メダルが最高の順位に与えられるものであり、金メダルを取っていなければ例え銅メダルを取っていたとしても一番すばらしいとは言えないということは、この状況で認められていると言えるだろう。これは(15)のように、銅メダルと金メダルのすばらしさに違いがないことを認めてしまう

---

<sup>4</sup> ワケジャナイはワケデハナイの異形であり、意味は同一であると考えられる。

と p ワケデハナイ文が不自然になることから分かる<sup>5</sup>。

- (15) B: 金メダルも銅メダルも同じメダルだよ。最高に素晴らしいね。銅メダル、おめでとう！  
A: その通りだね。ありがとう。??でも、金メダルを取ったワケジャナイから。

最後に(14d)だが、A が当該競技に参加していること、そして当該競技が終了していることが文脈から明らかであるところから、A が金メダルを取ったか取らなかったかのどちらかであるのは明らかである。従って、(14d)を前提とすることに問題はない。

以上のことから、(13)の p ワケデハナイ文は(14)を前提に使用されていると言える。

では、このような前提下で(6)の意味を持つ p ワケデハナイが使用されることから、如何にして(すばらしいが、)「一番すばらしくはない」という謙遜の推意を推論の帰結として持つことができるのだろうか。(16)を見られたい。

(16) (14)の前提及び p ワケデハナイ文の意味から得られる推意

- a.  $q \text{ at } w_R$  (14a)より
- b.  $\forall w (q \vee p \vee \dots \text{ at } w \rightarrow r \text{ at } w)$  (14b)より
- c.  $r \text{ at } w_R$  a,b より
- d.  $\forall w (\neg p \text{ at } w \rightarrow \neg s \text{ at } w)$  (14c)より
- e.  $w_R \notin p-W$  p ワケデハナイ文より
- f.  $\forall w (w \in p-W \vee w \in \neg p-W)$  (14d)より
- g.  $w_R \in \neg p-W$  f より
- h.  $\neg p \text{ at } w_R$  g より

---

<sup>5</sup> ただし、この点については多少注意が必要である。(i)の例を見られたい。

(i) B: 銅メダルですね。おめでとうございます。素晴らしいですね。

A: ありがとうございます。でも、{a. ??銀メダルを取った、b. 金メダルや銀メダルを取った、c. 銀メダル以上を取った} ワケジャアリマセンから。

(ib,c)は自然だが、(ia)は不自然になっている。つまり、(13)では、ワケデハナイの補部命題は「金メダルを取った」であり最高の順位を取った例であるが、ワケデハナイの補部命題は必ずしも最高の順位のみでなくともよく、2位以上や3位以上のように最高順位を含むある順位以上になっていけば良いと言える。

i.  $\neg s$  at  $w_R$

d,h より

(16)を見ると、(14a)~(14d)の前提と本論文で提案している p ワケデハナイの意味(6)から(14i)が導出されることが分かる。このように、「一番すばらしくはない」という謙遜の推意が導き出せるのである。

### 3.2. 励まし用法（最低の評価ではない）

p ワケデハナイは、最高でないことを推意として持つこともできるが、反対に最低でないことも推意として持つことができる。これは励ましの推意として機能できる。

(17) B: メダル、取れなかったなあ。

A: うん。でも、入賞できなかったワケジャナイから。よくやったよ。

(17)では、メダルを取れなかった B に対してメダルは取れなかったが入賞できていて、それは評価に値することであると励ましていると言える。以下では、この励ましの推意が本論文の主張から如何にして得られるかについて説明する。

まず、(17)の前提についてであるが、(18)のようなものを考えることができるだろう。

(18) (17)の p ワケデハナイ文の前提

a.  $q$  at  $w_R$

b.  $\forall w (q \vee p \vee \dots \text{ at } w \rightarrow r \text{ at } w)$

c.  $\forall w (\neg p \text{ at } w \rightarrow \neg s \text{ at } w)$

d.  $\forall w (w \in p\text{-}W \vee w \in \neg p\text{-}W)$

ただし、p、q、r、s は以下を表すとする

p:A は入賞できなかった

q:A はメダルを取れなかった

r:A はすばらしくない

s:A は最低だ

そして、(18)の前提と p ワケデハナイの意味から(19)のように A は最低ではないという推意が得られる。

(19) (18)の前提及び p ワケデハナイ文の意味から得られる推意

- a.  $q$  at  $w_R$  (18a)より
- b.  $\forall w (q \vee p \vee \dots \text{ at } w \rightarrow r \text{ at } w)$  (18b)より
- c.  $r$  at  $w_R$  a,b より
- d.  $\forall w (\neg p \text{ at } w \rightarrow \neg s \text{ at } w)$  (18c)より
- e.  $w_R \notin p\text{-}W$   $p$  ワケデハナイ文より
- f.  $\forall w (w \in p\text{-}W \vee w \in \neg p\text{-}W)$  (18d)より
- g.  $w_R \in \neg p\text{-}W$  e,f より
- h.  $\neg p$  at  $w_R$  g より
- i.  $\neg s$  at  $w_R$  d,h より

(19)の前提、及び推論の型は前小節のものと同一である。

このように、非極用法は(14)や(18)のような前提下で  $p$  ワケデハナイが使用された場合に現れる用法であるが、この用法が持つ推意は当該の前提下に本論文で提案している意味を加えたところから自然に導き出すことが可能なのである。

#### 4. 前置き用法

前節までで見てきた例は、 $q$  がまず提示され、その後に  $p$  ワケデハナイが提示されるという順序で現れるものだったが、既に指摘されている通り、「 $p$  ワケデハナイが  $q$ 」という型で、 $p$  ワケデハナイが談話の始めに現れる場合もある。本節では、 $p$  ワケデハナイがこの構文を持てることは、 $p$  ワケデハナイが(6)のような意味を持つことからの自然な帰結であることを示す。

本小節では、まず「 $m$  ガ  $n$ 」文が持たなければ特徴について述べる。そして、 $p$  ワケデハナイが(6)のような意味を持つと考えたと「 $p$  ワケデハナイが  $q$ 」が当該特徴を持つことができることを示す。これにより  $p$  ワケデハナイが(6)のような意味であるとするものの証拠としたい。

(20)を見られたい。

- (20) a. 太郎は学生だガ金持ちだ。
- b. 太郎は学生デ金持ちだ。

(20a)は(20b)と比べると、「太郎は学生である」と「太郎は金持ちだ」ということの他に  $+\alpha$  の意味を感じ取ることができる。(20a)はいわば(21)のようなことを言っているものと解釈できる。

(21) 太郎は学生であり、（ゆえに通常であれば金持ちではないが、）現状は通常でなく金持ちだ。

つまり、「太郎が学生であるなら、通常太郎は金持ちではない」と(20a)の話者が思っていることが(20a)の前提になっていると考えられる。実際、この前提を持ってないような文脈下では(20a)は不自然になる。(22)を見られたい。

- (22) a. 僕は「太郎が学生であるなら、通常太郎は金持ちではない」と思っているのだが、太郎は学生だガ金持ちだ。  
b. 僕は「太郎が学生であるなら、通常太郎は金持ちではない」とは思っていないのだが、??太郎は学生だガ金持ちだ。  
c. 僕は「太郎が学生であっても、よく金持ちであることがある」と思っているのだが、??太郎は学生だガ金持ちだ。

(22a)は(20a)の前提を明示したものであるが自然である。一方(22b)は(20a)の前提を否定した文が加えられており、(22c)はそれとおおよそ同じような意味を持つ文が加えられたものだが、どちらも不自然になる。これに対して(23a)、(23b)は(20b)にそれぞれ(20a)の前提を加えたもの及び(20a)の前提を否定した文を加えたものがであるが、どちらの場合も自然になっている。

- (23) a. 僕は「太郎が学生であるなら、通常太郎は金持ちではない」と思っているのだが、太郎は学生デ金持ちだ。  
b. 僕は「太郎が学生であるなら、通常太郎は金持ちではない」とは思っていないのだが、太郎は学生デ金持ちだ。

従って、次のことが言えそうである。

- (24) a. 「m ガ n」文は話者が「m なら通常一n」と思っていることを前提とする。  
b. そして、この前提を持つことが自然である場合に「m ガ n」文は自然になり、この前提を持つことが不自然である場合には「m ガ n」文は不自然になる。

以下では、「p ワケデハナイが q」構文の具体例を取り上げ、それが p ワケデハナイの意味を(6)とすると(24a)を満たしていることを見る。(25)を見られたい。

(25) A: 激しい運動をしたワケデハナイが、息切れしている。

(25)での  $m$  は「激しい運動をしたワケデハナイ」である。本論文の提案が正しいとするとこの  $m$  はどのような帰結を生むだろうか。

- (26) a.  $w_R \notin p\text{-}W$  p ワケデハナイ文より  
b.  $\forall w(w \in p\text{-}W \vee w \in \neg p\text{-}W)$  文脈より  
c.  $w_R \in \neg p\text{-}W$  a,b より  
d.  $\neg p$  at  $w_R$  c より  
ただし、 $p$  は以下を表すとする  
 $p$ : 激しい運動をした

(26)より、 $p$  ワケデハナイの意味を(6)とすると(26d)が演繹される。ところで、次のような条件知識を人が持つことは自然である。

(27) 激しい運動をしなかったなら通常息切れしない。

つまり、(28)が成立するわけである。

- (28) a. 「激しい運動をしたワケデハナイ」なら「激しい運動をしなかった」  
b. 「激しい運動をしなかった」なら通常「息切れしない」

従って、(25)の話者は  $m$  (= 激しい運動をしたワケデハナイ) なら通常  $\neg n$  (= 息切れしない) と思っていると考えることは自然なことであり(25)は自然であると解釈されるのである。

## 5. 結果状態の否定を表す $p$ テイナイと $p$ ワケデハナイ

$p$  ワケデハナイの  $p$  の述語動詞の場合、 $p$  テイナイ<sup>6</sup>と書き換えても文意があまり変わらないことが多い。

(29) B: 銅メダルですね。おめでとうございます。素晴らしいですね。

A: ありがとうございます。でも、{金メダルを取ったワケジャアリマセン、

---

<sup>6</sup> ただし、目的語につくヲ格はハに換えた方が自然なため例文ではそのようにしている。

金メダルは取っテイマセン} から。

(30) B: メダル、取れなかったなあ。

A: うん。でも、{入賞できなかったワケジャナイ、入賞できテイル} から。  
よくやったよ。

(31) A: {激しい運動をしたワケデハナイ、激しい運動はしテイナイ} が、息切れしている。

本節では、結果状態の否定を表す p テイナイと p ワケデハナイの違いについて考察したい。まず、(26)で見たように p ワケデハナイは「現実世界で¬p」を含意する。p の述語が結果動詞である場合、¬p であれば結果状態も存在しないことになる。従って、p の述語が結果動詞である場合、p ワケデハナイが可能であるなら、p テイナイも基本的に可能であることが予想される<sup>7</sup>。しかし、この逆はどうだろうか。結果状態の否定を表す p テイナイが可能であれば、p ワケデハナイも可能だろうか。

(32) (藻が発生してプールの水が緑になっているのを見て)

{a.ごみは浮いテイナイ、b.??ごみが浮いたワケデハナイ} がこれでは泳げない。

p テイナイは現実世界で p が実現していなくても p の結果状態が存在していれば使用可能である。そのため(32a)は自然になっている。一方、(32b)は次のような意味を持つ。

(33) (32b)の意味：現実世界は命題「ごみが浮いた」が真である世界ではない。

従って、(32b)は現実世界を擬人的に捉えれば、「ごみが浮く」という変化を過去に経験していない世界であると述べているのである。しかし、(32)の状況で問題となっているのは、発話時現在当該のプールが泳げる状態にあるのか泳げない状態にあるのかであり、当該プールがどのような経験をしたかではないため(32b)は不自然になっているのである。

---

<sup>7</sup> ただし、メタ言語否定の場合はその限りでない。p ワケデハナイのメタ言語否定用法については吉村(2010)を参照されたい。

## 6. 本論文の提案の反例になりそうな例

(26)で見たように、 $p$  ワケデハナイは通常 $\neg p$  を含意する。しかし、 $\neg p$  を含意していないように見えたり、実際に含意していない場合もあり、(6)の妥当性に疑問を投げかける例も見つけることができる。本節では、そういった例を取り上げ、(6)の妥当性を検証する。

### 6.1. $p$ ワケデモ $\neg p$ ワケデモナイ

$p$  の述語に形容詞や形容動詞が使用されるとき、 $p$  ワケデハナイと $\neg p$  ワケデハナイが共起できることがある<sup>8</sup>。(34)を見られたい。

(34) このケーキはおいしくないワケデハナイ。しかし、おいしいワケデモナイ。

これは(6)と(35)の両方が正しいと仮定すると(36)のように矛盾を生じてしまう。

(35)  $\forall w(w \in p-W \vee w \in \neg p-W)$

(36) (6)と(35)の両方が正しいと仮定した場合

a.  $w_R \notin \neg p-W \wedge w_R \notin p-W$  (6), (34)より

b.  $\forall w(w \in p-W \vee w \in \neg p-W)$  (35)より

c.  $w_R \in p-W \wedge w_R \in \neg p-W$  a,bより

d.  $p \text{ at } w_R \wedge \neg p \text{ at } w_R$  cより

ただし、 $p$ 、 $\neg p$  は以下を表す

$p$  : このケーキはおいしい

$\neg p$  : このケーキはおいしくない

(36d)は明らかに矛盾しているように見える。しかし、(34)は(37)に見るように直後に「普通だ」という発話を続けることができる。

(37) このケーキはおいしくないワケデハナイ。しかし、おいしいワケデモナイ。  
普通だ。

また、この(37)は(38)とほぼ同じ意味を表していると言えるだろう。

---

<sup>8</sup> 少なくとも片方は、ワケデハナイではなく、ワケデモナイになるのが普通のようなのである。

(38) このケーキはまずくない。しかし、おいしくもない。普通だ。

つまり、(37)の「おいしくないワケデハナイ」は「まずいワケデハナイ」と意味的には同一であり、「まずい」という表現を使う代わりに「おいしくない」という表現を使っているだけであると考えられる。おいしさのレベルを、レベル1「おいしくない (=まずい)」、レベル2「普通だ」、レベル3「おいしい」の3レベルに分け、レベル1でもレベル3でもないと言っているのである。もし、レベル1とレベル2しかなく、レベル1でもレベル2でもないと述べれば矛盾になるが、レベル1、2、3があり、レベル1でもレベル3でもないと述べた場合、論理的可能性としてレベル2が残るので矛盾には陥らない。(37)でも(38)でも、当該のケーキのレベルはレベル2であると述べているのである。

従って、(34)は表現上は矛盾しているように見えるが、「まずい」を「おいしくない」と表現しているだけであり、実際の意味上は矛盾しておらず、本論文の提案通り  $p$  ワケデハナイの意味を(6)と考えても問題ないことが分かる。このことは、(39)のように  $p$  ワケデハナイの述語を動詞にし、 $p$  と  $\neg p$  の中間が見つけれない状況にすると、 $p$  ワケデハナイと  $\neg p$  ワケデハナイは共起できないことから分かる<sup>9</sup>。

(39) ??太郎はケーキを食べたワケデハナイ。また、食べなかったワケデモナイ。

## 6.2. マダ $p$ ワケデハナイ

もう一つ、(6)と(35)の両方が正しいと仮定すると問題が生じてしまいそうな例がある。(40)に見るように  $p$  ワケデハナイはマダを伴うことができる。

(40) (野球の試合で8回の裏が終わって10対0で負けている状況で)  
マダ試合に負けたワケデハナイ。勝負はこれからだ。

マダ  $p$  ワケデハナイは、(41)に見るように  $p \wedge q$  が不可能であるにも関わらず、

---

<sup>9</sup> ただし、 $p$  ワケデハナイの  $p$  を単なる命題として解釈するのではなく発話と解釈して、次のような仕方で自然に解釈する方法はある。

(i) (太郎はケーキを食べたと思っている相手に対して) 太郎はケーキを食べたワケデハナイよ。もちろん食べなかったワケデモナイ。太郎はケーキを飲み込んだよ。

しかし、注1で述べたように本論文では  $p$  が発話の場合の  $p$  ワケデハナイは扱わない。

(42)のようにマダ  $q$  ワケデハナイと共起することが可能である。

(41) A:??私は試合に負けた。また、同じ試合に勝った。

(42) A: (引き分けはないという状況で) マダ試合に負けたワケデハナイ。もちろん勝ったワケデモナイ。(勝負はこれからだ。)

しかし、(6)と(43)の両方が正しいと仮定すると(42)から(44d)が導かれてしまい  $p \wedge q$  が不可能であることと整合性が取れなくなってしまう。

(43)(=(35))  $\forall w(w \in p-W \vee w \in \neg p-W)$

(44) (6)と(43)の両方が正しいと仮定した場合

a.  $w_R \notin p-W \wedge w_R \notin q-W$  (6),(42)より

b.  $\forall w(w \in p-W \vee w \in q-W)$ (35)より

c.  $w_R \in q-W \wedge w_R \in p-W$  a,b より

d.  $q \text{ at } w_R \wedge p \text{ at } w_R$  c より

ただし、 $p$ 、 $q$  は以下を表す

$p$  : A は試合に負けた

$q$  : A は試合に勝った

$p$  ワケデハナイの意味を(6)と考えることに問題があるため、このような事態になってしまうのだろうか。本論文では、(6)自体には問題はなく、(43)は  $p$  または  $q$  が既に決定している世界においてのみ成立するのであり、(42)で問題となっている現実世界は  $p$  も  $q$  も決定していない世界であるため(43)が適用されず、(44d)は導出されないと考える。つまり、マダ  $p$  ワケデハナイの意味は「マダ [ $w_R \notin p-W$ ]」であり、発時点では  $w_R \notin p-W$  が真になっていないと考えるのである。

このように考えることの根拠としては、ワケデハナイの代わりにテイナイが使用され、(42)とほぼ同義である(45)の存在がある。

(45) A: (引き分けはないという状況で) マダ試合に負けテハイナイ。もちろん勝ッテモナイ。(勝負はこれからだ。)

(42)も(45)も共に負けたかどうか決定される時点に至っていないことを意味していることが感知できる。つまり、現実世界  $w_R$  とはすべての命題の真偽が時点とは関係なく決定されているものではなく、時点により真とする命題が異なり、人が時間の経過に従って様々な出来事の経験を増やしていくのと同

じように、時間の経過により真とする命題を増やしていくような存在として捉える必要があるということである。そして、いくつかの命題に関してはその真偽値がその時点では決定されていないということがあるのである。このようなことが認められれば、発話時点ではまだ  $p$  でも  $q$  でもないが将来どちらかの値に決定されるという見方が可能になり、整合性がとれるようになる。このような考え方が妥当であることは(46)に見るように、 $p$  ワケデハナイの過去である  $p$  ワケデハナカッタが使用された後の時点で  $p$  あるいは  $q$  に決定されたと述べることができることから裏付けられる。

- (46) a.あの時点では我々のチームはまだ試合に負けたワケデハナカッタ。そして、いいところまで行った。しかし、最終的には負けてしまった。  
b.あの時点で我々のチームはまだ試合に負けたワケデハナカッタ。そして、奇跡が起こり、実際勝ったのです。

このように、マダ  $p$  ワケデハナイは(6)の意味を  $p$  ワケデハナイと考えると一見問題があるように見えるがそのようなことはないのである。

## 7. おわりに

本論文では、 $p$  ワケデハナイの意味と  $p$  ワケデハナイが発話された場合に持つ推意について分析し、 $p$  ワケデハナイの意味は「現実世界は命題  $p$  が真である世界ではない」であるとの提案を行った。一般に  $p$  ワケデハナイの意味は推論の否定であるとされることが多いが、それは  $p$  ワケデハナイがある特徴を持った前提の下で使用された場合にもたらされる推意なのであり、意味そのものではないと主張した。

$p$  ワケデハナイは、 $p$  ワケダの否定の形をしている。本論文での提案が  $p$  ワケダの様々な振る舞いについても有効であるかどうかについての検討は全くできなかった。また、 $p$  ワケデハナイは、吉村(2010)に見られるようにメタ言語否定とどのような関係にあるかも問題になるが、この点についても全く触れることができなかった。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク。  
大場美穂子(2013)「『わけだ』『わけではない』の用法についての一考察」『日本

- 語と日本語教育』(41)、慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター, pp.47-66.
- 齊藤学(2006)「自然言語の証拠推量表現と知識管理」、九州大学博士論文。
- 坂原茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会。
- 重見一行(2003)「『わけだ』文の基本的構造と多様性」『就実論叢』(33) (其の1)、  
就実論叢編集委員会編／就実女子大学、pp.1-14.
- 田窪行則(2001)「現代日本語における2種のモーダル助動詞類について」『梅田  
博之教授古稀記念韓日語文学論叢』太学社、pp. 1003-1025.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版。
- 永谷直子(2002)「『わけだ』に関する考察—『わけ』の相対性に注目して」『早稲  
田日本語研究』10、早稲田国語学会、pp.99-110.
- 日本語記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』、  
くろしお出版。
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』、くろしお出版。
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃著(2002)『新日本語文法選書4 モダリ  
ティ』、くろしお出版。
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店。
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000)『日本語の文法3 モダリティ』、岩波書店。
- 松岡弘(1980)「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』第  
24号、一橋大学語学研究室。
- 松岡弘(1993)「再説—『のだ』の文・『わけだ』の文」『言語文化』第30号、一  
橋大学語学研究室。
- 吉村あき子(2010)「日本語のメタ言語否定と『ワケデハナイ』」『奈良女子大学  
人間文化研究科年報』第25号、pp.1-12.
- 劉向東(1996)「『わけだ』文に関する一考察」『日本語教育』88号。
- 吉川武時編代表小林幸江・柏崎雅世(2003)『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書  
房。
- D, Sperber and Wilson, D (1986) *Relevance*. Basil Blackwell.
- Grice, H. P. (1975) Logic and conversation. In Cole, P & Morgan, J. (eds.) *Syntax and  
Semantics 3: Speech Acts*. pp.41-58, New York: Academic Press.
- Kratzer, A. (1991) Modality. In von Stechow, A. and D. Wunderlich. (eds.), *Semantik*.  
pp.639-650, De Gruyter.
- Nakau, M. (1973) *Sentential Complementation in Japanese*. Kaitakusha.

## *Wake de wa nai*

Manabu Saito  
(Chung Hua University)

It is often said that the meaning of *wake de wa nai* is negation of inference. However this expression has a use which cannot be accounted by this kind of understanding. Instead of the existing explanation, in this paper, it is proposed that below is the meaning of  $p$  *wake de wa nai*.

the meaning of  $p$  *wake de wa nai*:

$w_R \nleftrightarrow p$ - $W$  (the real world is not the world at which the proposition  $p$  is true.)

In this paper, it is illustrated that the "negation of inference", which has been understood as the meaning of this expression, is the implicature which is lead under the specific presupposition.